

「哲学する教師」になれるのか  
—あるいは、「高専てつがく」<sup>(1)</sup>の試みの経過報告—

小川泰治（宇部工業高等専門学校）

---

はじめに

2018年4月より山口県にある高等専門学校（主に中学卒業後の進路として5年間の一貫教育を行い、様々な分野の技術者の養成を主目的とする高等教育機関。以下「高専」。）に勤めている。3月の終わりにバタバタと引っ越し、一年間、主に低学年（16～18歳）の学生に対して「現代社会」や「倫理」の授業を担当してきた。40人を超える教室だけれど、哲学プラクティスの視点を取り入れた工夫をしながら、いわゆる「哲学対話」も複数回行う、そんな先生になっている。

本稿では、そんな私の哲学プラクティス上の個人的な悩みをふりかえっていきたい。「個人的なことは政治的なこと」という言葉は、哲学プラクティスにおいても通じるところがあるのではないかと思っている節がある。私にとって個人的なことを個人的なままに書き起こすことは、多くの人がかかわる一つの動きとしての哲学プラクティスの抱える問題とつながっているはずだ、あるいは共鳴するはずだ。そうゆるやかに信じたい。

1. 40人と「ゆっくり・じっくり」、に悩む

春。授業の柱には哲学対話を据える。このことは当初からの方針だった。初回は、授業の概要説明もそこそこに、40人を超える学生さんたちに円になって座ってもらい、クラスごとにコミュニティボールをつくる。きっと楽しんでもらえると思って教室に向かうけれど、廊下を歩いているとき、教室に入るときはとても緊張する。しかも、いきなり円になって好きな食べ物なんかを言いながら、毛糸を巻くなんて、受け入れてくれるだろうか。それぞれのクラスごとに大きく雰囲気は違うし、きっとまだ警戒もされているのがわかる。それでも、なんとかクラスごとに色

や大きさが様々のボールができた。

二回目の授業では、「みんな全然違うのに、人と人とはわかりあえるのか」を問いとして提示して、実際に哲学対話をした。答えの出ないことについて対話をしていくことの意義を最初からみんなで考えておきたい、という意図はあったのだけれど、今思えば、こんな大それた問いにするのではなくて、彼ら／彼女ら自身の考えたいことを素直に問いにしてもらうべきだった。

コミュニティボールづくりと最初の対話を終えた当時のメモがある。

2回やってみて、どのクラスも基本的に素直な学生が多い印象。ただ、難しい話することへの苦手意識があったり、実際本当にそういうことに慣れていなくてついていけない人がいるみたい。そのあたり、どのクラスもどんどん考えられる子のペースではなく、こちらもペースを落として、ゆっくり話をして、考えることを楽しめるようにしないといけないなあ。

[...]

40人を超える教室での対話の場合は、特に、学生の側から、「もっとゆっくり考えたい」「今の発言の意味がよくわからなかった」といった発言はすぐには期待できない。だからこそ、教員自身が一人の哲学する人として「ゆっくり・じっくり考えること」を心がけたいのだけれど、授業の進行や時間のことが気になってしまう。哲学やゆっくり・じっくりでも学校はせわしくなく、いそがしい。だから「哲学する教師」であろうとするのはとても難しい。

## 2. 「教室という箱の力」に悩む

授業では哲学対話もやるけれど、哲学者たちの思想の紹介も含む講義もする。授業時間になって教室に行って教卓を挟んで学生の前に立てば、クラス、個々人でももちろん程度の差はあれ、話は聞いてくれるし、指示をすればついてきてくれる。その意味で高専生は基本的に「優秀」だ。

## 苦悩の扉

そういう安心感に守られて、教室でははっきりと大きな声が出せている。聞いてくれるのをいいことについつい気分よく長々と話してしまう。もしかしたら自分は（下手なりに）授業を進めるのが上手なのかな、と勘違いすることもある。

でも、それは教室で、授業のなかで、教卓を挟んで、授業をちゃんと受けないと成績を下げるという圧倒的な力をもった「先生」だからこそであって、自分の力でもなんでもないの。それを痛感するのは、授業外に、授業では接しない学生に指導する必要のある場面。授業中ならあんなに話せたのに、教室外で面と向かってみると、声が喉をつつかえるし、（教室以上に）なよなよ、してしまう。

教室内でいい気分でしゃべる自分と、教室外でなよなよする自分とのあいだで当時の私は次のように悩んでいた。

教室外でなよなよしてしまうなら、むしろ教室という箱で自分が四十人の学生に対して偉そうにしゃべっている、そちらの方が変なのだと。このギャップは、教室外ももっと「先生」らしくする、ことでも解消できるけれど、その逆で、教室での授業をもっと、なよなよするというわけではないけれど、なんとというか、ふだんどおりの声でしゃべることでも解消できるのではないか、とも思ってしまう。<sup>(2)</sup>

しかし、教室でふだんどおりの声でしゃべればよい、というわけでもない。私になよなよしながらも、彼ら彼女らと楽しくしゃべれると、ついつい自分の手柄な気がしてしまうけれど、そうではないからだ。私語があったり、眠っていたり、内職したり、スマホいじったりもされるけど、それでも時間割通りに教室で彼らが前を向いてそこで私を待っていること。対話をしようといえ、やる気のない人たちも含めて重い机を動かしてイスをだけの円を作ること。実はこういう「学校という箱」のもつ隠れた強制力を哲学プラクティスは嫌うはずだ。「哲学する教師」もまた、こういう学校の気持ち悪いところなしではいられないのだろうか。

### 3. 授業の行き詰まり感到悩む

夏に差し掛かった時期のこと。高専では「倫理」や「現代社会」という科目名でも、内容については教員の裁量にゆだねられている面が大きい。それもあって、個人的に大事にしたい授業のテーマの一つが「ジェンダー」だった。ジェンダー・バランスが不均衡な空間だからこそ、「男らしさ」や「女らしさ」といったものが偏見や「呪い」になってほしくない。これからも大事に練っていきたいテーマの一つだ。

ただ、そういうテーマだからこそ、教えることと考えること、の間に授業が中途半端になって行き詰ってしまう。社会には、あるいは私たちの身の回りには、ジェンダーをめぐるどんな問題があり、それに対してどういったアプローチができるのか、などをざっくりと講義したあとで、学生のみなさんが立てた問いについて考え、最後にはコメントペーパー（「大福帳」と呼ばれるポートフォリオを使っている。）に考えを記入してもらおう。テーマ学習と哲学対話を組み合わせるなら、おそらくオーソドックスな流れの授業をした。

学生の感想にはこんなものがある。

- ・ 男らしさや女らしさというのは大事だと思います。それをなくしてしまうとみんな同じになってしまうからです。
- ・ 女性と話をするときは使う言葉に気を付けようと思いました。
- ・ 男女平等でないとされている今でも、社会はそれなりにうまくまわっているのだから、平等でなければならぬ、というのはないと思った。
- ・ こんな話をしたって性差別はなくならないと思いました。なぜなくならないのかと考える、それは私には荷が重すぎる。

ほかの授業では、学生の感想に一喜一憂することはあまりないのだけれど、このテーマでこの感想を目にしたときにはなんだかガクッと来てしまった。今思えば、どれも素朴な感覚としてはわかるものばかりだし、

## 苦悩の扉

ここからじっくりと対話へとつなげていくことは十分にできるだろう。それでも、そのときガクッときたのは、きっと、「一緒に考えたい」以上に実は自分が「教えたい」「考えてほしい」ことがたくさんあること、そしてそれを思いの外伝えられていないこと、に気づかされたからだ。

哲学対話を柱に、問いについて一緒に考える授業にしようと思った。哲学者についての講義もするけれど、実はそこで学んでもらう知識については忘れてしまってもいいと思ってもいる。それでもなお、実は自分と一緒に考えただけでは不十分で、教えたいことがあったということに戸惑ってしまったのだと思う。

### 4. 対話か講義か、に悩む

授業の区切りのタイミングでは、記名式のポートフォリオと学校指定の無記名のアンケート、両方で、授業についての感想や評価をお願いしている。こちらとしては、理系の学生さんたちだし、そんなに社会科の知識を講義で聞いても辛いだけでしょう。できるだけ対話やワークの時間があつたほうがいいと思ってくれているに違いない。こう思っていた。

けれど、ふたを開けてみると、特に「現代社会」を受けている学生さんたちからは、「授業全体に対しての哲学対話の回数が多い」「もっと講義を聞いたかった」「教科書の内容を掘り下げて勉強したかった」といったコメントが目立った。哲学対話を増やしてほしい、このままでよいという人のほうが多数派ではあるのだけれど、それでも社会の授業を講義型で受けたいと思っているなんて知らなかった！とびっくりし、戸惑ってしまう。...みんな講義したらしたで寝るじゃないか！

冷静になってみれば、もちろん講義型のものをもっと聞きたいという方がいる理由もわかる。そのなかには、社会科の勉強が好きだ！という方もいるだろうけど、もっと消極的に対話やワークをやらされることが嫌だから講義のほうがマシ、という想いもあるだろうと思う。確かに、強制参加の対話やグループワークをやり始めた途端にみんなが楽しんで考えているということのほうがはるかにおかしい。授業をアクティブに

するという事は、本当は大人しく椅子に座ってやりすごしていたい人たちにそれを許さないような暴力的なことでもあるのだ。「哲学する教師」は哲学を強制する教師でしかいられないんだろうか。

今この文章を書きながら、自分の授業の対話やワークの場を思い出す。対話の円のなかで、4人組で机を固めて座るワークの最中に、話し合ったり、考えたりすることよりも、とにかくその時間がただ過ぎることのみを望んでいるような身体をした学生はいなかったか。そしてその学生が目に入ったとき、見てみないふりをしていなかったか。けれど、もしその学生に気づけたとして、そのとき自分はどうすべきだったのだろう。

## 5. 哲学対話に悩む

秋から冬になるころ。対話か講義かに悩み、哲学対話を予定していた回で、講義メインの内容に切り替えたこともあったものの、数回に一度は、哲学対話へのチャレンジを続けていた。

「正義」をテーマにした授業のあとで、アンパンマンを題材にしたり（アンパンマンマーチを教室で流した！）、全員が問いを出すためにみんな立ち上がってホワイトボードに問いを書いてみたり、浅野いにおの短編漫画を素材にしたり、20人は対話、残りの20人はグループワークとクラスを二つに分けてみたり、はたまたシンプルにプレーンバナナ（学生たち自身が気になっていることを問いにすること）をしたりと、いろいろ試してみる。

対話を重ねていくと、感触がよいとき、悪いとき、がある。通常の講義でもそうだけれど、賑やかなクラス、賑やかすぎるクラス、反応のないクラス、も確かにある。でも、だからといって、授業がうまくいかないという教員の感じ方を、「あのクラスは学生がダメだから...」みたいに言うのは、ほんとうにダメである。一人一人別個の人間について、クラス単位で語るのを当たり前にはいけない。

では、教員である自分がダメだったのか。もちろん、自分ももっといい実践者になれると思うし、その日ももっとなにかうまいアプローチが

## 苦悩の扉

できたとは思う。哲学対話をする前の雰囲気づくりやルールやボールの使い方の徹底とか、心がまえや哲学対話をやる意図について丁寧に伝えていくとか、もっと関わって、もっと言っていけば改善できるはずだ。だから自分のせい、だ。

でも、あの場は自分だけのものじゃない。教育の場で責任を負う側の人間にとって悩ましいところではあるけれど、対話の場はやはり学生と一緒に作っていくものだ。だから学生のせいでも、ある。

何でも言ってい、自由に考えていい、対話はみんなで作っていくものとしたのであれば、対話の成り行きは、もっとも根本的なところで参加者に委ねなければならない。

誰が参加するのか、どこでいつやるのか、どれくらい時間をかけるのかによって、結果は違ってくる。うまくいく時もいかない時もある。コントロールできるものでもないし、すべきでもない。誰のせいでもなく、みんなのせいでもある。<sup>(3)</sup>

梶谷さんのこの文章はとても沁みる。

そうすると、哲学対話の授業を教員としてどうデザインしようか、という発想がそもそも間違っている、ということになる。教員の側が焦って手を加えようとすればするほど、学生さんたちは主体的に考えるどころか、与えられた場で指示された通りに動くお客さんになってしまうだろう。問いがうまく決まらなかったり、だれかがふざけだしたりしたときに、教員がなにか言ったり、止めたり、整理したり、するのを学生さんたちは待ってしまうだろう。

そういう意味では、自分に必要なのは、この授業はみんなでやるんだよ、起きることはみんなのせいなんだよということをもっとちゃんと伝えることになるのかもしれない。でも、学校の授業の教室で、それを伝えること、とても難しいのだ。

## 6. 「成績を人質にする」に悩む

冬。この一年間で計四回、成績をつけた。評価基準の60%に満たない学生については単位を認めないので、学生たちも必死である。けれど、採点や評価をしていて、採点をされているのは実は教員の側だ、と思う。こっちが独りよがりで教えた気持ちになっていることが、いかに伝わっていないかを思い知るという意味で、だ。点数が取れないことを学生のせいにするのは簡単だけど、その前に自分が授業を受けている人たちの理解を確認せずに、ごりごりと進めていた結果がこうなのではないか。あるいは、授業中にスマホを触っていたり、居眠りをしているのを知りながらも、みすみす見過ごしてきた結果なのだ。もちろん、そうであってもいいとは思っていた部分があるけれど、でも答案をみながら、こういう指導、支援でよかったのか、という思いはよぎってしまう。

「成績表って、ある種の「人質」だと思っています。」と言った知人がいる。本当にそうだ。学生が急に席を立たずに大人しく話を聞いているのも、試験勉強のために私の研究室にまで質問に来るのも、結局は成績評価という関係性でつながっているからこそ。「哲学する」ことの要件になるような対等な関係、安全な関係とは程遠い。だったら、成績評価を一切やめてしまえばよいのかもしれないけれど、それほどロックなことはできなくて、せめてなるべく丁寧かつ誠実に、納得できる評価をもらってもらえるように一年間がんばったつもりではある。

それでも、年度の終わりになって、成績を人質にするのをやめてみたくなってしまった。たまたま、補講日が試験後の期間に設定されていたこともあり、学生にはその日、哲学対話をする予定であること、そして出欠はとるが成績評価には関係しないことをしつこく伝えてみた。こうすれば、成績とは無関係に哲学対話に関心のある人が集まってくれるはずだと思ったからだ。その結果、ごっそり欠席者が出て、それは仕方ない。これを伝えてから当日まで、とても不安な気持ちに駆られて過ごした。これまで授業に行けばほとんどの学生が当たり前のように待っているという安心感を成績を人質にすることによって得ていたのだ。



## 苦悩の扉

けれど、ふたを開けると、もちろん欠席者は多数いたけれど、それでもそれなりに出席者がいる。ただ、いざ哲学対話に移っていこうとしても、乗り気な人たちは決して多くない。はっきり、ダルそうだし、普段の授業よりも私語が目立つなあと思いながら授業をしていて、気づく。ああ、出欠（ですら）もまた学生にとっては人質なのだった。人質の関係から解放されて、対等に学生と共に哲学する場を学校につくること、次の一年どうやってこれにチャレンジしていったらいいんだろうか。

### 7. もちろん、自慢だってある

ここまで、いろいろ悩んでばかりで、楽しいこともうまくいったこともないように書いてきたけれど、もちろん自慢したいこともある。

ありがたいことに、高専では教員一人一人に研究室がある。学生さんは、放課後など、ちょっとしたおしゃべりに尋ねてくれた。さらに、授業外に有志での哲学対話の会を企画、授業や SNS で声をかけて、やってみた。7月の初回は参加者1名、翌週は3名、8月は3名、間があいて12月は7名、3月は9名（すべて総数には私自身も含む）と、少数ではあったけれど、関心をもってくれる学生がいたことは、一年間を通しての手応えだったし、癒される楽しい時間だった。

アンケートに励まされることもあった。

授業中って教師と生徒、お互いに「人間」であることを忘れる瞬間があると思ってる。でも、先生の授業は生徒が人間であることを認めてくれ、先生が人間であることも忘れなかった。すごいと思う。

匿名でのこのコメントを呼んだときには、さすがにしびれた。こんなコメントが書けるあなたのほうがすごい。けれど、なるべく誠実に、教員としての権威を利用せずに、と思って、試行錯誤に悩んだけれど、一人にでも伝わって、こういうコメントが引き出せたことについては、自慢したいのだ。

## おわりに—私は何に悩んできたのか

私は一年間、実践をしながら何に悩んできたのだろう。執筆を通してわかってきたのは、学校という組織の教員としての使命や責任のようなものと、一人の哲学する人としての使命や責任のようなもののズレに悩み、揺れていた、ということ。

「学校という箱」は恐ろしいところで、成績を疑い、学生のまえでなよなよしたり、対話の場を作ることに苦悩していても、それでも、少しずつ「学校」という場や「先生」という仕事に疑いをもたなくなっていく。年上である（だけの）自分が年下である（だけの）学生に対して、指示し、語り、教えることの権威性に違和感を持たなくなっていく自分に気づいてしまう。そんな空間でどうやったら哲学し続けられるんだろう。「哲学する」と「教育する」は両立させていけるんだろうか。「哲学する教師」であることはできるんだろうか。

途方もなくて、発狂しそうにもなるけれど、同時にやるべきことはとてもシンプルでもある。次の一年もまた悩みながら、問いをもち、ゆっくり・じっくり考える人であろうとすること。発狂寸前で立ち止まり、少しの自慢とたくさんの苦悩とともに、「高専てつがく」を継続しよう。

## 註

- (1) 「高専てつがく」というネーミングは、昨年度非常勤をさせていただいた別の高専で出会った学生さんたちと「授業関係や哲学対話のことについて Twitter でさらに考えられるハッシュタグがほしいね」という話題になり、生まれたもの。それ以来、気に入って、自身の実践の呼称としてずっと使わせてもらっている。
- (2) 小川泰治「ああ、教室という箱の力よ」、はてなブログ『高専てつがくは発狂する』、2018年4月30日執筆、<http://p4c-essay.hatenadiary.jp/entry/2018/04/30/221813>。
- (3) 梶谷真司『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』、幻冬舎新書、2018年、pp. 245-246。